



(挨拶の中坪達哉会長)

令和八年度総会及び春季俳句大会が、木々の緑もあざやかな六月六日(土)午後一時より北日本新聞ホールに於いて九十七名が参加し盛大に行われた。司会

は荒木かつを幹事。開会の挨拶で中坪達哉会長は、今年から気象用語に「酷暑」が加わったことを挙げて「気象の変化で歳時記と実際の季節感がどう違って行くかを眺める、また時代の变化で見られる新たな光景をどう詠んで行くか、句を作る楽しさが増えたとも言えよう」と語った。総会の議長に岡田康

令和八年度 総会及び俳句大会 小林 貴子 先生の講演を聴く

裕理事を選出し中島平太事務局長が令和七年度の事業報告、収支決算報告を行い、菅野桂子監事が監査結果を報告し承認された。さらに令和八年度事業計画案、収支予算案を提案し、原案通り承認された。また、役員一部改選について中坪会長から提案があり、四宮一子理事、白井重之

理事(逝去)の退任に伴い、新たに坂田直彦氏が理事(幹事より)に就任。坂田直彦、森純子両幹事の退任に伴い、新たに栃原百合子、樋掛もえぎ両氏が幹事に就任することが報告され、全ての議案は可決し総会は滞りなく終了した。

続いて現代俳句協会副会長、「岳」編集長小林貴子先生の記念講演が、「今読みたい前田普羅」を演題として行われた。前田普羅の俳句の根幹をなす「地貌」を中心に季節や地域の特徴を織り交ぜ、自然の姿を人間の感情と結びつけ句を詠むことが大切であると述べられた。(講演要旨は別掲)

富山県 俳句連盟会報

第 102 号

令和八年七月一日発行
富山県俳句連盟
富山県民芸術文化祭会場
〒930-0094 電話 〇七六-四四三三四三
振替番号 金沢 五二七二〇八
北日本新聞社編集局内

小憩後、俳句大会に移り既に出句されていた四百八十二句(二百四十一名)について、講師及び連盟役員によって選考された特選句並びに入賞句を高橋せつ子幹事、北川秀子幹事が披露し、表彰式に移る。まず、講師の小林貴子先生より丁寧な講評を頂き、続いて楠浩介北日本新聞社編集局生活文化部長から北日本新聞社賞を、中坪達哉会長から連盟賞がそれぞれに贈呈された。(成績は別掲)

浅野義信副会長が閉会の辞を述べ、総会、俳句大会は盛会裡に終了した。

富山県俳句連盟 夏季吟行会 (予告)

日時 七月十九日(日)午後一時〜四時
会場 富山県民芸術文化祭会場
(富山県民芸術文化祭会場)

交通費 二句出句 千円
市電利用 富山駅より大学前行き
終点下車 十五分程度
バス利用 富山駅より高岡駅、
小杉、新湊、富大付属病院方面
行き
富山大学前下車 二十分程度

合同句集(第五十一集) 原稿募集

句集を次のとおり刊行いたします。同封の原稿用紙により全員ごぞってご応募ください。

○作品数 十五句(令和七年七月から令和八年六月までの自選句)

○記載要領 所定の原稿用紙に姓号、(ふりがな) 作品(春夏秋冬の順が望ましい) 本姓名、生年月日、郵便番号、住所、電話番号、所属結社または句会名を記載する。希望者は住所等の未掲載可。

かなづかいには新旧混用せず何れかに必ず〇を付けること。

○締切 七月二十五日(土)期日厳守。

○出句料 三千円(一冊進呈)

同封の振替用紙で原稿発送と同時に郵便局へ払い込むこと。

○送付先 〒九三五一〇〇〇五

氷見市栄町一〇一二六

坂田 直彦 方

富山県俳句連盟合同句集係宛

○刊行予定 十月三日

富山県芸術祭主催
富山県民芸術文化祭参加
富山県俳句連盟秋季俳句大会(予告)
講師 料理人

日時 十月三日(土)午後一時
会場 北日本新聞ホール
※越の讃歌、募集句のテーマ「海」

春季俳句大会作品抄

◇小林 貴子 先生 特選句

これほどに大陸近し 霾れり
梨の花夕べは夕の色となり
雪吊解く支柱に縄を絡めつつ
春月をあげ潮騒の子守歌
雪にひろげ晒す楮に日の匂ひ

◇連盟選者特選句

義 信選 春炬燵母のぬり絵の鳩飛んで
かづを選 春愁や止まぬ戦の果てしなく
冬 青選 菜の花の和え物添えて介護食
可津志選 百歳の小さき欠伸春の雲
こうき選 母の忌や身をのせて切る寒の餅
喜 子選 曲がりたる十指いとしむ弥生尽
康 裕選 覚めきらぬかはづの背へ鎌の先
芙 美選 うららかや屋根に大工の腰袋
城 子選 空腹は幸福なこと春耕す
弥 生選 海へ山へ空へ伸ばす手子らの春
秀 子選 世界中同じ青空鯉幟
美智子選 初蝶の過去を持たざる白さにて
洋 子選 椿見て落椿見て帰りけり
直 彦選 喪の客にひとしく降り春の雪
一 子選 十数へ風呂上る癖昭和の日
桂 子選 真似てみるデイスコダンスや春めく日
恵 子選 イヤリング今は補聴器山笑ふ
昭 夫選 うか／＼と転び涅槃の空つかむ
勇 選 向き合うて芋植う畝に風走る
せつ子選 母の忌や身をのせて切る寒の餅
眞知子選 うららかや百寿の母の髪を梳く
寿 山選 ばかし絵と化して一村杉花粉

◇入賞句

平 太選 言の葉が春風になる絵本館
広 美選 足付きの御膳十客臘月
達 哉選 母の忌の手押し車や花蘇枋
睦 子選 潮の香の変わる荒磯涅槃西風
美知子選 起き伏しの母の影なす春障子
多佳子選 庭に立つ父の面影松の芯
眞智子選 本の帯はらりと落ちて夜の臘
幸 子選 生きて来し思ひ出胸に山櫻
あつ子選 探梅や脇道といふ新天地
千鶴子選 百歳の小さき欠伸春の雲
純 子選 イヤリング今は補聴器山笑ふ
敬 三選 母の忌や身をのせて切る寒の餅
稔 選 遺されし椅子の生む影春の窓
とおる選 春炬燵母のぬり絵の鳩飛んで

天 位 8点(特選1)
地 位 8点
人 位 7点(特選2)
イヤリング今は補聴器山笑ふ
四位 7点(特選1又はなし)
立山の夜明けは峽の辛夷より
弁当は親子の絆卒業す
喪の客にひとしく降り春の雪
行く雁の声落しゆく黒部川
菜の花の和え物添えて介護食
言の葉が春風になる絵本館
五位 6点
春うらら砂場に並ぶ小さき尻
白梅やたとへば手漉和紙のいろ
うか／＼と転び涅槃の空つかむ
卒業の門出最後のチャイム鳴る
合格子の外して見せる腕時計

長谷川知子
小泉 恵子
松谷眞佐子
新村美那子
野中多佳子
高橋せつ子
野中多佳子
岡本 美美
杉本 恵子
二俣れい子
堀 禮子
中尾 三久
高木 昭夫
二俣れい子

野中多佳子
八尾とおる
堀 禮子
小坂優美子
大崎 寛子
室井千鶴子
石黒 順子
吉田 憲子
長谷川知子
細野 千里
川井 城子
荒木 陽子
栃原百合子
山崎 和子

畑返す老いの二人に見合ふだけ
六位 5点

豪農の館に文庫梅真白
春耕や楽しみ作る農日記
椿見て落椿見て帰りけり
探梅や脇道といふ新天地
春愁や一日切符の始発駅
春炬燵母のぬり絵の鳩飛んで
十数へ風呂上る癖昭和の日
鉛筆を舐めれば濃し昭和の日
若布茹で父の漁舟の匂ひふと
七 位 4点(特選1)
足付きの御膳十客臘月
曲がりたる十指いとしむ弥生尽
潮の香の変わる荒磯涅槃西風
覚めきらぬかはづの背へ鎌の先

村田 昇治
升田 義次
生田 伸子
室井千鶴子
杉本 恵子
村田 悦子
二俣れい子
齊藤 孝臣
久保 俊一
橋本しげこ
小泉 恵子
大倉 寿恵
新村美那子
木澤 迪子

富山県現代俳句協会

秋季吟行俳句大会(予告)

日時 九月二十六日(土) 午前十時受付開始
会場 岩瀬カナル会館
吟行地 会場の近隣地域
参加費 二句 千円(当日会場受付時に支払い)
会員でなくても参加できます。

俳人協会富山県支部 俳句大会(予告)

協会員以外の方のご参加も歓迎いたします。
日時 九月二十三日(水・秋分の日) 午後一時
会場 富山電気ビル四階光の間
講師 蘭草 慶子 先生
令和七年度俳人協会賞受賞
俳人協会評議員
「秀」同人「星の木」所属

講演要旨



今読みたい前田普羅

現代俳句協会副会長、「岳」編集長

小林 貴子



「岳」俳句会は昭和五十三（一九七八）年に創刊され、創刊当時から「風土」が大きなテーマでした。昭和三十年、能村登四郎の白川郷、沢木欣一の能登塩田の連作が注目され、「風土俳句」が俳句の世界の重要なテーマとなりました。しかしこれらは、旅人がその土地を取材して作る「吟行句」でした。そこで、長野や富山のような地方に住む我々にとって、「風土俳句とは何か」という問いは切実な問題でした。風土という言葉には、都鄙意識、都会への抵抗感、地方に生きることの受容など、複雑な感情が内包されています。

平成八（一九九六）年、「岳」創刊二〇〇号記念号で、宮坂主宰の発案で四十八ページにわたり前田普羅の特集を組みました。

普羅は句集『春寒浅間山』の序文で「自然を愛すると謂ふ以前にまづ地貌を愛する」と謂はねばならなかった。此の山は、此の溪谷は、此の高原は、何故にかく在らねばならなかったかと思つたのが其れである。それにはいづれにしても其の在るが儘の姿の依らざるを得なかった理由がある。それらの地貌は地球自らの収縮と爆発と、計るべからざる永い時でふ

もて削られ、碎かれ、又沈殿集積された姿である。その地形は風をさへぎり水を阻み、風を呼び水を招き、其処に各独自の理想を有する地形が出来上つて居た、一つ一つの地塊が異なる如く、地貌の性格も又異なるざるを得なかった。空の色も野山の色もたがへざるを得ない。謂はんやそれらの間に抱かれたる人生には、地貌の母の性格による、独自のものを有せざるを得ないのである」と述べています。

「地貌」は地学用語で「地表面の形状」を意味しますが、普羅はそれ以上に深い意味を与えました。大地には山、谷、川、野原など、一つ一つ固有の「貌」があります。その土地の地形が風や水を遮ったり招いたりすることで独自の気象を生み、そこに住む人間の生活や気質にも影響を与えます。俳句は、その土地ごとに異なる「貌」の違いを明らかにすべきだと、普羅は考えたのです。

第一句集『普羅句集』は昭和五年に刊行。

人殺す我かも知らず飛ぶ螢 普羅

大正二年作、人間が状況次第で人を殺す存在になりうると見据えた厳しい自己省察の句で、現代的な感性を持つ句です。大正十二年、関東大震災で自宅が焼失

した後、普羅は焦げた鈴を唯一の残存物として見出し、その後の住まいを「焦鈴舎」と命名。「辛夷」に発表する自句欄のタイトルを「焦鈴舎句屑」とされました。昭和十二年、「甲斐の山々」と前書のある、

茅枯れてみづがき山は蒼天に入る

霜つよし蓮華とひらく八ヶ嶽

駒ヶ嶽凍てて巖を落しけり

茅ヶ嶽霜どけ径を糸のごと

奥白根かの世の雪をかがやかす

この五句が普羅の代表作となつています。飯田蛇笏の山廬を訪れて、普羅は何度も山中を歩くのですが、登山をするのではなく、麓や溪谷を渉猟したのです。続く戦中から戦後にかけて、句集『春寒浅間山』『飛驒組』『能登青し』が発刊されました。浅間山や白根山を詠んだ句と、飛驒を詠んだ句と、能登を詠んだ句とを一冊の句集に入れるのは自分の本意と異なるというわけで、国別三部作となりました。これこそ「地貌」を重視する普羅の目指したところです。

『春寒浅間山』

春星や女性浅間は夜も寝ねず

春の火山の情念を表現し、加藤楸邨が〈冬の浅間は胸を張れよと父のごと〉と冬の浅間山を男性的に捉えたのと好対照です。私は浅間山と対面するたび、どちらの句の捉え方も真実であることを実感します。

『飛驒組』

乗鞍のかなた春星かぎりなし

浅間と同様に、乗鞍の星も美しいですね。『能登青し』

蜷捨てて出て福浦に顔うつる

清冽な能登の海を捉えた句とともに、この「蜷」の句などは、まさにこの地の特色をこの地のことばで生かしています。昭和二十年、富山空襲にて被災した後、

普羅の晩年は、安住の地を求めてさすらい続けるという厳しい境遇になりました。秋風の吹きくる方に帰るなり

放浪から再び富山に帰る普羅の心の内

には「秋風」が吹き止まなかったことでしょう。

普羅の「地貌」から発想し、宮坂静生は「地貌季語」を提唱し、三十年以上にわたり、蒐集と提唱を続けてきました。地域の言葉でまだ季語になっていないけれど、季語と同様のはたらきを持つ言葉です。一例として、北陸の「桜隠し」、富山の「バタバタ茶」、雪国の「木の根開く」などがあります。運動の成果として地貌季語の一部は角川の新しい大歳時記に掲載されています。ご支援頂いている富山の皆さんのおかげです。

普羅は横浜または東京生まれ、演劇や歌沢を好んだという面から、その本来は繊細な趣味人、都会人であると、飯島晴子さんは書いています。その普羅の俳句を自身も思いがけない方へ広げたのが「地貌」という観点であり、さすらいの後半生と相俟って、生への葛藤や抵抗や受容、そういったものを句として残すことになったのだと思います。葛藤や抵抗は感受性の強い人ほど鋭敏に感受してしまうものですが、創作活動こそがその葛藤への応答であり、心を解き放つ営みであると考えます。

ご清聴ありがとうございました。

令和7年度決算報告書

(単位:円)

収 入 の 部				支 出 の 部					
科 目	予算額(A)	決算額(B)	差(B－A)	備 考	科 目	予算額(A)	決算額(B)	差(A－B)	備考（決算の内訳）
繰 越 金	1,437,023	1,437,023	0		事 務 費	380,000	198,609	181,391	通信費 150,562 消耗品費 16,181 その他 31,866
会 費	1,080,000	1,116,000	36,000	R 7 年度分会費	会 議 費	80,000	67,881	12,119	
過年度分会費	15,000	15,000	0		事 業 費	1,000,000	1,037,224	－ 37,224	総会・春季大会 595,270 夏季吟行会 51,219 秋季大会 251,762 会報 122,473 越の賛歌 16,500
助 成 金	150,000	150,000	0	富山県芸術文化協会より	交 通 費	200,000	156,700	43,300	
寄 附 金	5,000	94,920	89,920		負 担 金	55,000	35,000	20,000	富山県芸術文化協会負担金
合同句集代金	750,000	738,000	－ 12,000	第50集 購入246部	合同句集代金	920,000	905,850	14,150	第50集 300部発行
雑 収 入	60,000	58,208	－ 1,792	夏季吟行会参加費、利息	雑 支 出	40,000	2,640	37,360	振込手数料
					予 備 費	822,023	0	822,023	
合 計	3,497,023	3,609,151	112,128		合 計	3,497,023	2,403,904	1,093,119	

(収支差額(収入合計-支出合計) 1,205,247円 は次年度へ繰越)

令和8年度予算計画書

(単位:円)

収 入 の 部				支 出 の 部					
科 目	予算額(A)	前年度予算額(B)	差(A－B)	備 考	科 目	予算額(A)	前年度予算額(B)	差(A－B)	備 考
繰 越 金	1,205,247	1,437,023	－ 231,776		事 務 費	350,000	380,000	－ 30,000	通信費 240,000 消耗品費 50,000 その他 60,000
会 費	1,020,000	1,080,000	－ 60,000	R 8 年度分会費	会 議 費	80,000	80,000	0	
過年度分会費	15,000	15,000	0		事 業 費	900,000	1,000,000	－ 100,000	総会・俳句大会 720,000 会報 150,000 その他 30,000
助 成 金	150,000	150,000	0	富山県芸術文化協会より	交 通 費	200,000	200,000	0	
寄 附 金	5,000	5,000	0		負 担 金	55,000	55,000	0	富山県芸術文化協会負担金
合同句集代金	720,000	750,000	－ 30,000	第51集	合同句集代金	920,000	920,000	0	第51集発行
雑 収 入	60,000	60,000	0	夏季吟行会参加費、利息	雑 支 出	40,000	40,000	0	払込手数料 他
					支出計	2,545,000	2,675,000	－ 130,000	
					予 備 費	630,247	822,023	－ 191,776	
合 計	3,175,247	3,497,023	－ 321,776		合 計	3,175,247	3,497,023	－ 321,776	

◇受賞

○令和七年度文部科学大臣表彰

(地域文化功労者)

中坪 達哉

令和7・11・19

○第44回とやま文学賞佳作 荒田眞智子

◇消息

○富山県現代俳句協会は、三月二十九日令和八年度定期総会を富山県教育文化会館で開催した。その後春季俳句大会が行われた。会員七十一名が事前に一句ずつ投句し、当日参加者四十二名の互選で入賞句を選んだ。

天位 日めくりは命日のまま大晦日

地位 のどけしや施設の母のVサイン

人位 春夕焼妻は浄土へ行ったきり

○第五回県現代俳句協会賞

受賞 今日もまた海を見ている十二月

準賞 黄泉国のことは幻覚桃は実に

準賞 海鳴りに倒るる野菊立つ野菊

○滑川市俳句大会が令和七年十一月二十九日滑川市博物館で開催。講師は川井城子富山県俳句連盟幹事、「表情」主宰。

演題は「先人達の名言に触れて」。

川井 城子 特選

軍手脱ぎ濡れ土の香や芋畑 高橋 祐一

すすき原一山押し上ぐほどに揺れ

早稲の香と磯の香せめぎ合ふ越路

高橋せつ子

荒木かづを

岩城 鯉汀 特選

神の留守山姥守る村社 西加山さよ子

町田 宙児 特選

風の盆根付けさらりと揺らし行く

高井 富子

○魚津市の俳誌「喜見城」(代表川上弥生)が令和七年十一月号で創刊九百号を迎えた。一九四九年創刊。喜見城は蜃気楼の別名。

◇句集等出版紹介

句集「今生の一刻」くろせ行雲 令7・12

句集「十五年」森野稔 令7・12

合同句集「連峰」みのり俳句会 令8・3

◇訃報

県俳句連盟理事 白井 重之氏

令和八年三月二十四日、ご逝去

謹んで哀悼の意を表します。

第44回とやま文学賞 作品集

俳句 未発表句 二十句

(手書きの場合は四百字詰原稿用紙、ワープロ・パソコン原稿は20字20行)

締切 令和八年九月三十日(消印有効)

送り先 〒930-0096 富山県舟橋北町七一

(二社)富山県芸術文化協会事務局

〈とやま文学賞〉係宛

編集後記

連盟会報102号をここにお届け致します。尚、会報担当は今回から高田勇氏に変わります。次回103号は令和八年十二月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば原稿用紙に記入の上、左記に送付下さい。

送付先 樋掛もえぎ

〒939-1135 砺波市鷹栖一三七五

TEL 〇七六三 三三一 一〇二〇